

わが校歌の兄はピアノ協奏曲だった？

兵庫県立津名高等学校同窓生 岡内 とどむ

※ 本記事は研究書の少ない時期に同窓生に向けて書かれたため、出版物からの引用を含んでいます。

特別寄稿

【序章】
大澤壽人、
再会のきつかけは
「おのころ会」

i ひとくち勉強
我々第一六期生有志は年
末に毎年同窓会「おのころ
会」を開催している。昨年
で一七回目。会場は大阪に
始まり、三ノ宮・神戸・そ
して数年前から舞子駅前へ
と淡路島にすり寄つて来
た。一ひとつの加齢現象か
(笑)

参加者も四〇名程度にな
り三年前から柳圭吉先生・
徳田泰治先生にも出席いた
だいている。ピルの七階か
ら淡路島が真正面に見える
レストランを見つけ、ここ
がお決まりの会場。ワイワ
イガヤガヤ二時間程。お開
きはいつも同じ、全員で母
校と淡路島に向かい大声の
校歌斉唱で締
め括る。

三年前、折
角の機会だか
らこの会で、淡
路島の事・母
校の事のひと
くち勉強をや
ろうとの声が
あがった。翌
年の第一回は
長尾秀美君が
調べた「校章
の由来につい
て」。第二回の
当番になった
小生は「校歌

について」を選んだ。(昨年
第三回は「淡路島の芭蕉句
碑について」)

ii 大澤壽人?

さて「校歌について」で
は作詞者と作曲者について
の情報を提供することに
し、母校のホームページか
ら作詞↓竹中 郁 作曲↓
大澤壽人の情報を得た。竹
中郁は優れた近代詩人であ
るとの知識があった。それ
では、大澤壽人(おおよそ
ひさと)とはどんな人なの
か?竹中郁とバランスがと
れるレベルの人なのだろう
が皆目判らない。そこで、
インターネット検索。する
と眼前に大澤壽人ワールド
が広がって来た。

【第一楽章】 大澤壽人・没後半世紀 忘れられていた 稀代の天才作曲家

ネット検索他で種々の
データを集める傍ら、大澤
作品のCDがリリースされ
ていることを知り早速買
求めた。まずピアノ協奏曲
第三番を聴いたが素晴らし
い曲だ。第二次世界大戦前
に日本人によりこれほどの
曲が作曲されていたとは、
しかもこれほどの曲がほぼ
七〇年これほど演奏されて
こなかったことに二重の驚
きを禁じ得ない。

* 日本作曲家選輯・大澤壽人
ロシア・フィルハーモニー管弦
楽団(平成一五年三月モスクワ
にて録音)

わが校歌の兄はピアノ協奏曲だった?

第一六期生 岡内 とどむ

でない等主張
しこれはクリ
アーした。
つぎの難題
は公募が特命
か特命なら誰
かを選ぶか?
いずれも意見が
種々出た議論
を尽したので
あるが結局作
詞は竹中郁に
決まった。

④幸運 母校に
竹中と昵懇の人物

半世紀たつ
た今校歌制定
過程を鳥瞰すると、母校に
とつて幸運だったのは竹中
と言う著名な詩人と師弟・
朋友・詩友の関係にあった
隅田泰弘先生の存在であ
る。小川元延先生に伺った
ところでは隅田先生は「大
阪にいるときから昵懇なの
で竹中郁なら頼めるよ」と
関係者に言つてあつた由で
ある。



パリ時代の大澤壽人(二九歳)

i 音楽環境

大澤は明治三九年神戸
市の裕福な家庭に生まれ
た(父は神戸製鋼創設に参
画した実業家、母はクリス
チャン)。幼少時母親から
ピアノの手ほどきを受け、
後に「深江文化村」の亡命
ロシア人ピアノリスト(ロシ
アの音楽院の教授であった
アレクサンドル・ルーチン)
等にピアノの指導を受けた
(いわゆる「阪神間モダン
ズム」の洗礼を受けた)。
関学在学中に内外のプロの
音楽家と一緒に各地の演奏
会に出演するとともに、自
己流で作曲・編曲にも取り
組んだ(関学行進曲他を発
表)。一介のアマチュアな
がら昭和初期、神戸や大阪
ではもう充分に目立った音
楽家の一人だった。

ii 留学時代

昭和五年・二四歳(昭和一年・
三〇歳(ボストン四年パリ二年)
関学卒業後ボストン大学
スミス教授に招かれ世界の
音楽のメッカのひとつボス
トンへ。正式に作曲と音楽
理論を勉強すべく同大学音
楽学部、さらにニューイン
グランド音楽院に入学し
た。有名なコンバース博士
の薫陶を受け、やがてボス
トンで新進作曲家として知
られる存在になっていった。
大学卒業後ボストン交響楽
団を指揮し、自作の交響曲
第一番・ピアノ協奏曲第一
番等を披露。小沢征爾に先
駆けること四〇年、同楽団
を指揮した初の日本人と
なった。ラジオを通じピア

ノ曲・室内楽曲等の自作品
を発表した。

昭和九年大澤はその音楽
的技術をより完璧なものに
するためパリへ移り、高名
なポール・ドユカスとナデ
イア・プーランジエに師事。
翌年コンセル・パドウル
管弦楽団を指揮し、パ
リで作曲した交響曲第二番・
ピアノ協奏曲第二番を上演
し大成功を収めた。そして、
華麗な六年間の留学期を締
め括り昭和十一年に帰国し
た。この間大澤の主要作品
の多くが作曲された。

iii 帰国直後

然しながら、意気揚々と
帰国した大澤が東京・大阪
で幾度か催した作品発表会
は十分な評価を得られな
かった。その反省から、よ
り平明さや伝統に配慮して
作曲した交響曲第三番とピ
アノ協奏曲第三番も同様
だった。演奏技術的にも作
風的にも当時の日本では受
け入れられなかったのでは
ある。(今回の帰国は一時的
なものであり)大澤は自分
を評価してくれる欧米へ活
動の場を移したかったが戦
局の悪化で叶わなかった。

iv 戦中戦後

日本の間尺に合った仕事
をせざるを得なかった大澤
は音楽発信の場を演奏会か
らラジオ・映画・宝塚のレ
ビューなどのための作曲と
演奏等に多くのエネルギー
を費やすようになった。戦
後はNHK・朝日放送で番
組を持ち聴衆への啓蒙的役
を担った。

【第三楽章】 「時は二二世紀」 遂に私の時代が来た!

i 復活ののろし 遺品発掘
平成一二年夏、藤本賢市
(神戸新聞記者)と片山杜
秀(日本近代音楽史の読み
直しを図っていた音楽評論
家)とが神戸の大澤家で多
くの手稿譜等の現存を確認
した。半世紀にわたり眠り
続けていた遺品の発掘は大
澤復活ののろしとなった。
片山は平成一五年リリースの
「日本作曲家選輯・大澤壽人
の企画に参画。このCDは平成
一五年度文化庁芸術祭レコー
ド部門最優秀賞を受けた(余談
だが、片山は政治思想史研究
者で慶応義塾大学法学部准教
授。「時は二二世紀」はこのCDの
キャッチコピー)。

ii 急速に進む再評価

そして、平成一五年二月
日本人作曲家の再評価を目
指すオーケストラ・ニッポ
ニカがピアノ協奏曲第三番
を蘇演し本格的再評価がス
タート。そののちの演奏会
やCDリリースにより人々
の関心が集まり始めた。こ
の半世紀を超えるときの流
れは、時代を先取りした大
澤作品に時代が追い付いた
ために必要な熟成の時間だ
つたと言える。

iii 遺品寄贈と大澤資料

プロジェクトチーム
平成一八年八月(時あた
り)

割を担っていた。映画音楽
は溝口健二監督・吉村公三
郎監督等の作品で約三〇本
に及ぶ(余談だが、大澤の
そばで楽譜運搬係をしてい
た関学の先輩が後の高島忠
夫である)。神戸女学院大
学で教職にも就いた。昭和
二五年前後から社歌・校歌
等の作曲依頼も増えて来
た。「時代の寵児」と言え
るセンサーショナルな活躍
ぶりで常に多忙を極めた。
そんなある日、神戸女学
院大学の研究室へ淡
路島から県立高校の先生が
校歌作曲の依頼に訪ねて来
た。竹中の紹介だった。(津
高新聞によると校歌制定に
あたって音楽担当の横山國
男、生徒会担当の広田楠美
両先生が中心になったと記
載されているので、恐らく
横山先生が作曲依頼に行か
れたものと思われる。)

【第二楽章】 そして運命の

昭和二八年
校歌作曲依頼、
校歌制定、
大澤の急逝

i 校歌制定過程

津高新聞(当時は津高新
聞と称する時期があった)
によると、昭和二八年一月
二九日竹中の歌詞が母校に
着く、二月三日に竹中の紹
介で大澤へ作曲正式依頼、
(大澤の創作ノートに二月
一日作曲とのメモ)二月
二五日志筑公会堂での卒業
式で卒業生・在校生・学校
側等校歌斉唱(制定式)と

かも没後半世紀・生誕一世
紀の誕生日)に大澤家は生
前大澤が教鞭をとっていた
神戸女学院大学に段ボール
四三個分の遺品を寄贈し
た。同大学音楽学部は直ち
にプロジェクトチームを立
ち上げ研究・分析にかか
り、目録の作成・コンサ
ートの実施等意欲的に取り組
む。同チームによれば「録
音プロジェクト」及び「評
伝」執筆が進行中であり、
数年後には自作自演の貴重
な音源資料をもとにCDを
リリースし、大澤からの「未
来への遺産」にしたいとの
ことである。なお、目録「煌
めきの軌跡」は平成二〇年
度音楽クリティック・クラ
ブ特別賞受賞。

現在作成中の大澤のホー
ムページがスタートすれば
資料公開の状況を容易に見
て取れることと相まって同
大学がいわば大澤ワールド
の情報発信基地となるもの
と期待される。

演奏会は「大澤壽人スベクタタ
ル」と称し分析が進んだ曲から
順次蘇演している。平成二四年
三月三日の公演「大澤壽人スベ
クタクルⅢ」はその三回目。会
場で大澤の長男壽文氏とお会
い出来たのでいい校歌を作っ
て頂いたお礼を申し上げてお
きました。

iv 大澤作品を継続的に 上演している

オーケストラ
神戸女学院大学音楽学部
及びオーケストラ・ニッポ
ニカ以外では関西フィル
ハーモニー管弦楽団が大澤

の記載がある。以下(いい
機会なので)同新聞・エン
ジの青春・六〇年のあゆみ
の記事により校歌制定まで
の経緯をやや詳しく追って
みる。(巽靖弘・脇素子両
先生に貴重な資料を用意し
て頂きました)。

① 沸き起こる校歌制定運動

母校が発足して四年経過
した昭和二六年になると学
習・生徒会・文化・体育等
の方面においても急激な発
展を遂げて来た。洲高・洲
実に負けない学校造りを目
指す以上校内的にも、また
対外的にもその存在を象徴
し表現する校旗・校歌を制
定しなくてはた。第二生徒
会長小久保正雄は昭和二七
年の選挙立候補に当たり
「校旗・校歌制定」を公約
として掲げ当選した。

② 校旗・校歌作成委員会

昭和二七年の夏、生徒
会・同窓会・育友会・職員
から各々代表を二名ずつ出
し本委員会をスタートさせ
た(戦後民主主義の息吹を
感じさせる)。生徒会から
は小久保会長、水室副会長
を送り込んだ。

③ 二つの難題

校旗制定は順調に進んだ
が校歌は思わぬ難題に直面
した。育友会から「自分達
の校歌は自分達で作れ」と
の意見がでたのである。そ
こで生徒会側は今迄生徒間
で作品募集をやったことも
あるが結局要領を得ないで
終わっている事、校歌のご
とき学校を象徴する大事な
ものを軽はずみにすべき

作品を積極的に上演してい
る。指揮者飯盛泰次郎はド
イツでもデュッセルドルフ
交響楽団を指揮しピアノ協
奏曲第三番を上演した。

v 再評価後の大澤作品の 取り上げ状況

- (曲名、再評価後の上演等)
- ・ピアノ三重奏曲 演奏会1回・CD
- ・ピアノ五重奏曲 演奏会1回・CD
- ・ピアノ協奏曲第一番 演奏会1回
- ・交響曲第二番 演奏会3回・CD
- ・ピアノ協奏曲第二番 NHK TV 放映
- ・ピアノ協奏曲第三番 演奏会3回・CD
- ・ピアノ協奏曲第三番 演奏会8回・CD
- ・ヴァイオリン小協奏曲 演奏会1回・CD
- ・交響曲第三番 演奏会1回・CD
- ・ピアノ協奏曲第三番 NHKBS TV 放
- 映
- ・トランペット協奏曲 演奏会1回・CD
- ・その他多数 NHK FM 放送

【最終楽章】 オール津名高、 「誇り」と「感謝」

我が校歌は稀代の天才作
曲家の作品である。ピアノ
協奏曲・交響曲を始め大澤
の膨大な作品群はいわば我
が校歌の兄弟である。我々
は誇りと親しみを持って兄
弟作品の演奏される会場へ
足を運び、大澤音楽の復活
を支える一員となろう。(そ
の第一歩として、インター

ネット・ユーチューブで「大澤壽人」を検索し、ピアノ協奏曲第三番を聴いてみるよ。

同時に校歌を歌う時、我々は竹中・大澤という素晴らしいコンビを選び、その制定向け情熱を傾けた昭和二七・二八年当時の生徒会並びに先生方に深甚なる感謝の気持ちを持つ。

(今回、田中崇由希先生によりインターネット・ウィキペディアの両氏の作品欄に「兵庫県立津名高等学校校歌」が書き加えられた。小生はこれも校歌制定に関わった人々への思いの表し方のひとつと受けとめる) 完

わが校歌の兄はピアノ協奏曲だった？

表明としてこれに感じた(母校は早い時期の依頼である)。我が校歌も含めその作品群には

清純な感情の涵養、考察力や友情の育成などへの願いが込められ、明瞭で、自由奔放に作詞されているという特徴がある。

そして、押しつけがましい教訓や道徳臭、過度に郷土の名所旧跡を自慢すること等を忌避している。というのは、彼が何よりも芸術性が備わった歌いやすい口語詩であることや、明るく気品に満ちていることを校歌の第一義としたからである。紫綬褒章等受章。

参考(引用)文献・・・
①(煌(きら)めきの軌跡II)
平成二三年八月刊(九三ページに「津名高等学校校歌 兵庫県立」の記載あり(涙)
神戸女学院大学・大澤壽人遺作コレクション 詳細目録
②(いま蘇る音楽大澤壽人―センセーションを呼ぶ作曲家)
平成二三年度研究助成
神戸女学院大学音楽学部 大澤資料プロジェクト代表 生島美紀子
③(阪神間モダニズムが生み出した二人の音楽家：貴志康一と大澤壽人)
平成二三年三月
神戸大学 紀要論文 松井真之介
④(日本作曲家選輯CD二枚
ピアノ協奏曲第三番・交響曲第三番
ピアノ協奏曲第二番・交響曲第二番)
CDについての詳しい解説文
音楽評論家 片山杜秀 平成一五・一八年

⑤(竹中郁作詞「紀見小学校校歌」試論
―故辻田豊学兄に捧ぐ―)
平成一九年三月
関西学院大学・史紀要論文
北川 久

⑥(楽譜他コピー)
平成二四年三月七日神戸女学院大学で得た「楽譜(自筆鉛筆書き・歌詞原稿・創作ノート)」の写し。歌詞原稿には(男子の方にむくように)との大澤の書き込みがある。作曲依頼に伺った先生が「女学校から男女共学への脱皮を目指しているの(男子生徒を意識し)意気揚々と大きな声で斉唱できる曲を作曲してほしい」趣旨のお願いをしたのを大澤が書きとめたものと思われる。

筆をおくにあたって

わが交響詩を
いまに遺せし
もろびとの
あつきおもひの
―ありがたきかな

(隅田先生に敬意を
払い校歌を交響詩と表す)

本起稿の機会を与え、終始上手におだててくれた(笑)お二人にこの詠を捧ぐ。
母校の先生にして後輩・・・
浜田厚美さん
おのころ会の
仲間にして校医・・・
高島玲子さん

作曲者を中心に 校歌のルーツを求めて

同窓会長 薄 木 昌 信

母校の在學生及び同窓生は、校歌について、作詞者は近代詩人として著名な竹中郁氏であることは多分御存知のことと思います。が、作曲者である大澤壽人氏は、一体どんな人なのか、そもそも校歌は、どのような経緯でいつ頃制定されたものか、については殆ど御存知ないし、知る機会もなかったと思われまふ。

母校は、平成二二年一月一日に、「しづかホール」において、創立九〇周年記念式典を盛大に挙行しましたが、その際にアトラクションとして、日本が世界に誇るNHK交響楽団の堀 正文氏の指揮の下で、N響室内合奏団に、校歌を演奏してもらいました。その美しい見事な演奏に、当日出席していた関係者約八〇〇名の全員が、あのN響が母校の校歌を演奏してくれたことに対し心から感激しました。同窓会事務局では、この記念式典に校医でもある高島玲子さん(二六期生)が、とても感動されていましたので、「同窓会の会報への寄稿に掲載したいので、校歌について是非とも執筆してほしい」旨を申し入れたところ、「私より同期生の岡内君が詳し

い。なんなら私から頼んでみる」と請けていただき後日内諾を得たと連絡いただきました。

そこで、改めて事務局から岡内さんに、原稿執筆の依頼をしましたところ、「前から関心があったので作曲者に焦点をあてつつそのルーツを調べてみましょう」と快く引き受けてくださいました。それが、今回ここに掲載することになった「わが校歌の兄はピアノ協奏曲だった？」と題する寄稿文です。

同窓生の皆さん方におかれまして、この寄稿文をお読みになって、作曲者(作詩者)の素晴らしさと校歌制定のルーツに感動されたことと思います。

岡内さんは、この寄稿文を完成するにあたり、津名高新聞を含む各種の文献を調べたり、神戸女学院大学に出向いたり、母校へ来て小川元延先生に当時のいきさつをヒアリングするなど長期間にわたり調査、検証して下さいました。

私は、ここに、同窓会長として、今回の寄稿に改めて敬意を表すると共に、厚くお礼申し上げます。ところで校歌について勉強してみようとの後輩たち

への参考にとこのたび岡内さんから各種文献・CD・楽譜コピー等寄贈されました。本来校歌関係の資料等が一堂に集められ在學生が自由に閲覧できる事が望ましいと思われまふ。この機会に例えば図書館への校歌コーナー設置(その内容、設置時期等も含め)につき具体的には母校と協議したいと思ひます。これが実現できれば現在図書室にある「同窓生文庫」と相まって在校生・同窓生のシンボルがより充実いたします。百周年に向け積極的に準備を進める先駆けになるものと確信いたします。(我々は、この機会に「大澤壽人」の曲を聴いてみよう。通販でならCDは1,000円程度で買えるようです)

なお、今年の津名高校の卒業式は、平成二四年二月二八日に挙行され、最後に校歌斉唱がありました。が、今回校歌のルーツが判明したことを祝福するかの如く、卒業生一九八名全員が、例年にならぬほど大声で校歌を斉唱していたことを報告し、私のこの紹介文の結びといたします。

岡内さん、ほんとうにありがとうございました。

岡内さん、ほんとうにありがとうございました。